

第 9 回市史講座ミニレポート：平成 30 年 12 月 15 日（土）

「松江の自然～見どころあれこれ～」

佐藤仁志先生（松江市文化財保護審議会委員）

今回の市史講座では、松江市史自然環境部会の専門委員・佐藤仁志先生に、現在編集中の『松江市史』史料編「自然環境」の内容に沿って、松江市における自然環境について、特に生物分野を中心にお話いただきました。

『松江市史』では、平成 26 年度末に通史編「自然環境・原始・古代」を発刊し、さらに平成 31 年度には史料編「自然環境」を発刊予定です。通常、市史（市誌）といえども歴史が中心となり、自然環境についてはついたり程度であることが多いのですが、『松江市史』では自然環境について通史編・史料編それぞれがあり、かつ史料編はまるごと 1 巻が「自然環境」ということで、その内容も充実しています。こうした内容や構成は、専門家の間でも高い評価を受けているとお話しされました。A4 版 600 ページのうち約 3 分の 1 をカラーページが占めており、豊富な写真や図版が掲載されること、生物分野の本文では各分野の総説と、これまで確認されている全種について、学名入りの目録を掲載することなどをご紹介されました。

松江市の生物相の特徴として、まず、全国的には絶滅が危惧される種が、松江市では豊富に確認されているとお話がありました。例えば国のレッドデータブック（以下 RDB）では準絶滅危惧と掲載されているドジョウや、絶滅危惧Ⅱ類として掲載されているミナミメダカ、両生類では、国 RDB のほか広島県・山口県でも準絶滅危惧のトノサマガエルやアカハライモリも、松江ではたくさん見つかるそうです。



さらに、松江の特産であるヤマトシジミは国の RDB では準絶滅危惧種に、淡水に住むマシジミは絶滅危惧Ⅱ類に選定されています。こうした情報から見ても、松江市の豊かさがうかがえます。

次に、先生が「特異な湖である」とされる宍道湖についてお話しされました。宍道湖は全国で7番目に大きな湖ですが、塩分濃度は海水を1とすると1/10という弱汽水の安定した水域であり、非常に珍しいのだそうです。これがヤマトシジミの繁殖に適しています。(1) 広大な弱汽水域であること、(2) 水深が浅く、太陽の光が入りやすいこと、(3) 定着性の生物種数が少ないこと(一方で魚など移動性の生き物が多い)、(4) 特定種が猛烈繁殖していること、(5) 固有種などが存在していることなどが、宍道湖の特異さを表しているとのことでした。

こうした特異な環境を有する宍道湖特有の種として、「シンジコハゼ」がいます。マハゼより小さく、通常はオスが婚姻色を出すのに対し、このハゼはメスが真っ黒な婚姻色を出すという珍しい種だそうです。日本では宍道湖が初記録とのことでした。ロシアの学者が1978年に新種として発表しましたが、先生方の地道な分布調査の結果、弱汽水域に多いということが分かりました。大陸移動の際に、現在の宍道湖と同じ塩分濃度の時代が長くあったのではないかとすることも考えられるようになったそうです。

植物に目を移すとハマビワやホソバワダンなど、島根半島を本州における分布の北・東限とする植物が多くみられるのだそうです。

そのほか、陸産貝類ではカタツムリのサンインマイマイ、チクヤケマイマイ、両生・は虫類では大東・松江市内などでみつかるとヒダサンショウウオやカスミサンショウウオなど、貴重な固有種もあり、ぜひ覚えておいてほしいとお話しされました。

こうした貴重な固有種が見られる一方で、近年は外来生物の増加も問題となっています。ミシシippieアカミミガメやブタナ(北海道ではタンポポモドキと呼ばれる)などの外来生物が蔓延り、在来種を脅かしています。哺乳類では、ニホンジカは個体群が広がってきており、深刻であること、イノシシも普通は夜しか見られなかったものが、昼間にも人家の側に現れるようになったこと、外来種であるヌートリアや、ハクビシン、アライグマなどが増えてきていることに警鐘を鳴らされました。

もうひとつ、ニホンアシカについて詳しく触れられました。海に棲む哺乳類であり、日本固有種であったニホンアシカですが、乱獲や海洋環境の悪化等により1950年代に絶滅したといわれています。このアシカについて、神話「因幡の白兔」に登場する「ワニ」が実はニホンアシカ

シカであったのではないかとする説を紹介されました。ガマが穂をつける 5～6 月頃にニホンアシカが繁殖期を迎え集まること、白兔海岸の岩礁地形はアシカが集来する絶好の地形であることなど、ニホンアシカの生態と神話の情景が非常によく重なるということです。また、11 月 23 日の夜に行われる出雲大社の古伝新嘗祭では、ミチ（ニホンアシカ）の皮を敷いた上にご飯と酒を載せた膳が置かれ、神事が執り行われること、神話の世界が今でも出雲大社で生き続けていることをお話しいただきました。

最後に、佐藤先生は「松江（島根）の自然はすぐれているといわれるが、すぐれた自然とは？」というテーマでお話しされました。すぐれた自然は、10 段階の「植生自然度」という指標で表され、人の手の付け具合が少ないほど高くなり、自然林に近い二次林とする 8 以上の割合が多いほど「植生自然度が高い」と言えるのだそうです。島根県を見てみると、県土面積に対するパーセンテージでは植生自然度「7」とされる二次林の面積が最も多く、植生自然度「8」の面積は全国平均 24.7%に対しわずか 9%と、九州や東京都よりも低いのだそうです。中国地方で見るとさらに低くなるのだそうですが、大きな理由としてあげられるのが「たたら」に伴う自然林の伐採です。中国山地は標高が低く、人が入りやすかったこともあり、たたら操業に必要な炭を得るため、多くの山林が伐採されました。ただ、昔は伐採した後には年月を置いて森を再生させており、ただ伐採するだけでなく「持続可能な開発」を行っていたということです。こうした地域の歴史的背景と植生自然度の関係を踏まえ、すぐれた自然とは何かをお話しくれました。

我々が住む松江には宍道湖をはじめとする特異な自然環境があり、固有種や全国では絶滅を危惧されている生物種が多数存在していること、一方で外来生物やイノシシ、ニホンジカの増加の問題もあり、今後より一層、松江の生物相に目を向けることが大切であると教えてくださいました。